

1月27日付 山本哲照さんの「小学校時代の私はどんな子供だったのか」
「～その1。同級生の作文から～」に寄せて

7組 中條満

山本さんの標記の作品を楽しく拝読させていただきました。

小学校6年生の国語授業の時間に作文を書かれた藤井輝生さん、望月郁文さん、水口幸治さんとは私も中学校、高校でどこかの時点でクラスを一緒にさせて頂きました。

日頃の語り口調とおりの文筆でのびのびと書かれかなり経ちますが傍らにいるように感ぜられました。その作文には担任の「岩本實先生の批評」がしるされておりました。

お父様はもう一人の杉本和子さんの作文をご自身で書き写し携帯されておられました。そこには「ほんとうに、いいやまもとくんになりつつあります。そして又、僕はそれを信じています。自分でよく考える山本君故。」と書かれている。お父様は嬉しかったのです。親心ですね。前々回作「没後68年の亡き父の名をネットで発見！！」で妹さんたちのことを気遣っているのが印象にありました。作文の中で4人の方が一様に妹思いであると書かれています。「岩本實先生の批評」で「そんなに妹思いになる山本君。それがこの中で僕はいちばんうれしいことである」と書かれている。そんな子供であったのですね。

また山本さんは作文を72年間大切に手元に保管しておりました。「岩本實先生の批評」は上から目線ではなく的確でその人なりをとらえ素晴らしいご指導でありました。前回作の「無着成恭と小学校の恩師」で学力・友人との交流など「岩本先生が私にとっても最も恩義を感じる印象深い先生」ですと、書かれていることから伺えます。

山本さんから「その恩師の岩本實先生の甥御さんと連絡が取れるようになりました。次回作でそのことに触れられる」と聞いておりました楽しみになっています。

その次回作「その2」を楽しみにしています。さらにさかのぼって昭和22年4月～昭和28年3月で、6歳から12歳までのこと。昭和22年度は戦後新教育の初年度であり、その時代背景を含めて、通知票のコメントなど楽しみですね。

完